

## 第4章 農の教育に果たす役割について

鹿児島大学 神田 嘉延

### 1 はじめに

鹿児島県の事例を中心にして、農の教育に果たす役割について、本論で問題提起をする。ここでは、教育の内容論や教育実践が地域の力になっていくうえで、教育的価値と社会的・経済的価値をどうやって結びつけていくかが、重要な課題になる。実際に教育実践家のサイドから考えると教育的価値というのが前面に出る。教育学研究においても教育的価値が重視されるが、子どもの実際の生活論からの生きる力の養成を考えていくと、地域の社会的経済的構造との関係で、教育実践をみていく必要があると言える。

いま話題になっている教育基本法の問題にしても、実は人格の完成という中には、実際の生活との関係だとか、社会の形成との関係だとか、勤労と責任の関係ということが、教育基本法の教育目的・方針のなかで重視されている。しかし、学校教育の現場では、その視点が弱く、社会との関係が薄く、学校が閉鎖的であることが問題にされているのである。学校教育の閉鎖性ということは、教育実践の大きな問題であった。子どもの発達の問題を子どもの現実の生活のなかでとらえていく視点が弱く、地域の社会経済的なかで、子どもの生活からの教育現象をとらえていくということが、実際に生きている子どもに未来への諸能力の力をつけていくうえで、大切である。

教育学は、実践的な側面が強調される学問である。例えば、問題行動を起こしている子どもが、どうしてそのようなことをするのか。このことを社会的、経済的な背景との関係で、発達の歪みを解明していくことが課題になっていく。そして、さらに、進路との関係、未来への関係で子どもをどう立ち直らせていくかということも非常に重要な研究課題になっていく。教育のことを考えていく上に、社会・経済的な価値と教育的価値の連携ということで、教育問題を深めてみる必要が、地域の未来を担う子どもを発達させていく、実践的な教育学の方法論として大切なことである。

そういう点で、いま、生きる学力ということが非常に話題になっているけれども、これは、ある意味で、科学の大衆化における教育の役割ということばかりではなく、個々の地域の中で住民の人たちがみずからの力で地域を自立的に発展させていく、そういう人間の諸能力の形成と結びついて地域の未来を考えていかなければならないのではないか。このような視点から、僻地に焦点を合わせながら、農の教育の役割を地域に根ざした実践的な教育活動の中から問題提起していく。この実践的な事例は、鹿児島全体から見れば極めて例外的な地域である。とくに、農林水産省の事業で、むらづくり表彰でのむらづくり日本一になった事例を大切にして、その地域の社会経済構造との関係で農業・農村の教育の役割ということの問題提起していく。

むらづくり日本一ということは、立場によって、いろんな基準があるから、日本一にな

ったからすべてが良いというわけではない。しかし、それなりに地域づくりに頑張っているところである。そういう地域を取り上げながら、一体その中で小学校がどんな役割を果たしてきたのかということの問題提起して、農の教育の役割について、考えていく。

現在、総合的学習の時間の導入で年間 110 時間、地域に根差した教材づくりというのが可能になった。このような学校教育の教育課程の大きな変化のなかで、学校と改良普及所の連携事業も鹿児島各地で、始められている。そういう点で、不利な農業立地条件といわれた僻地において、有機農業の普及だとか施設農業ということで、土地の依存度が相対的に低下している状況も生まれている。また、I ターンだとか通勤農家ということで、例えば、鹿児島市は 50 万の都市であるけれども、そこから通勤して農業をやるというようなさまざまな新しい形態が生まれている。そういうさまざまな新しい形態が学校との関係でどういうふうにあるのかということをし問題提起したい。

## 2 小学校校区の地域活動と近隣都市との交流による地産地消

1 つは出水市の上場というところであるが、自治公民館による村づくりと小学校との連携が出来ている事例である〔神田(2002)〕。ここでは高原牛乳を地域特産品として学校給食に利用してもらうことにしたので、出水市のすべての学校の児童・生徒がこの酪農家の牛乳を飲んでいる。それを端緒にして高原牛乳が地域に普及して、地域のほとんどの住民が、この牛乳を飲むようになり、この酪農家は出水市民によって支えられているという関係が成立した。この小学校の校区の地域づくりを支える出水市民も 300 人ほどいる。毎年交流パーベキュー大会をやったりして農民を支えている。この地域には年間 10 万人の出水市民や大口、水俣、近くの小都市から人々が集まってくる場所である。

もともと上場という集落は、開拓農民と昔から住んでいた旧住民と、集落は 1 つであるけれども、実際の集落活動は 2 つになっていた。それが 1994 年に統一される。戦後一貫して旧住民と新住民を常に結びつけてきたのは、集落のなかにある小学校の地域に根ざした活動であったということは特記すべきである。

学校があることによって地域がまとまり、地域のさまざまな行事が学校行事と一緒にあったのである。集落内の祭りだとか、さまざまな氏子関係の行事は別々にやっている。しかし、運動会や子どもに関する集落活動は、学校を通してまとまっていくわけである。これらの学校の地域活動は、戦後一貫して続いてきている。

むらづくり年表ということで、資料 1 に示した。このようにさまざまな活動をしてきたところである。むらづくり日本一ということは、そういう学校の校区を中心にした地域活動が認められて、むらづくり日本一になったということである。

ここは農家戸数が 53 戸で、集落の戸数も 79 戸と小さな集落である。伝統的に 2 つの旧住民、新住民という関係であったところを学校の地域活動を中心にして、まとまってきたところに特徴がある。この集落の人たちは酪農を中心にして生計を立てている。一応農業によって、自立した生計が営まれて地域である。最近では、狂牛病問題ということで、10 億円の規模を持っていたのが 7 億円ということに下がっている。でも、農業で生計をやれ

資料1 むらづくり年表

年次	生産面	生活文化面
江戸時代	[嘉永5年:1852年] ・天草郡栖本村より緒方二八氏が上場に入り、開墾の畝をふるう [安政2年:1885年] ・天草郡馬場村より多数入植、戸数40戸を越す	
明治・大正時代	[明治45年:1912年] ・上場排水工事により開田(2.3ha)	[明治40年:1907年] ・農事記念碑建立(戸数43戸)
昭和元～20年代	[昭和18年] ・戦時食糧対策事業農兵隊により、麦・いも、豆類作付け [昭和20年] ・上場農兵隊解散、帰農組合結成後、上場に居住し開拓を続ける [昭和23年] ・上場開拓農協発足(47戸)	[昭和18年] ・青椎、角石、上場道路開通 [昭和20年] ・帰農組合を中心に食糧緊急生産基地として上場新集落(旧開拓集落)発足 [昭和23年] ・朝日小学校分校創始 [昭和28年] ・自家電気利用組合発足、電灯がつく [昭和29年] ・町村合併により大川内地区が出水市となる 上場小学校独立
昭和30～40年代	[昭和37年] ・乳牛の放牧始める(6頭) [昭和40年] ・過剰入植7戸離農 [昭和41年] ・養蚕農家育成事業開始 ・酪農振興事業開始 [昭和44年] ・団体営・公社営草地改良事業(約80ha)に着手(～昭和53年) [昭和48年] ・減農薬茶栽培に取り組む ・オーストラリア産ヘリホード導入 ・上場開拓農協解散	[昭和34年] ・バス運行始まる [昭和36年] ・電気送信線完成、自家電気利用組合解散 [昭和37年] ・季節保育所開所 [昭和40年] ・上場遺跡(旧石器時代)の発見 [昭和43年] ・へき地診療所開設 [昭和49年] ・開拓地整備事業により道路舗装工事(1.650m)
昭和50～60年代	[昭和56年] ・有機無農薬茶の栽培に取り組む [昭和58年] ・「上場高原牛乳」の販売開始 [昭和59年] ・「肉・牛乳の消費拡大」と都市住民との交流のため「バーベキューin上場高原」開催	[昭和55年～62年] ・開拓地整備事業(第2次)により道路舗装工事(3.248m)
平成元～	[平成4年] ・上場地区長期ビジョンづくりに着手 [平成5年] ・大干ばつにより多大な被害、開拓地整備事業により営農飲雑用水施設整備に着手 [平成6年] ・女性グループ「天の市」発足、直売に着手 [平成8年] ・乗用型茶摘採機等導入(県単事業) [平成9年] ・ロールベアラー等導入(県単事業) [平成10年] ・大型トラクター等導入(県単事業)	[平成2年] ・上場農村緑地広場完成(県単事業) ・緑地広場で菜の花、コスモスの植栽実施 [平成6年] ・上場集落と開拓集落の合併 [平成7年] ・「むらづくり活性化計画」策定、「新・農村振興運動」の重点地区に指定される ・県農業・農村コンクールで知事賞受賞 [平成10年] ・「古代マーケット」開店 ・全国農林水産祭「むらづくり部門」において天皇杯受賞 ・営農飲雑用水一部通水(31戸) [平成11年] ・水道事業完成全戸通水(平成12年3月)

平成10年「豊かなむらづくり全国表彰事業推薦調査」より

ている農家が多い地域である。この地域では、学校のPTAの関係が大変強いだけでなく、酪農家が教育ファーム全国ネットに入ったり、棚田保全のためにということで地域住民が活動している。棚田を守る活動を中心に行っている地域住民は、5年前に移住してきた人である。もともと精神科の仕事をしてきた人であるけれども、棚田に魅せられて、ここで生計を立てている人である。その人たちも学校教育とは別の形で、農業の持つ教育力ということで、近くの都市の住民に呼びかけて農業教室を開いている。そういう中で、安定的に牛乳の配達に乗せるために、牛のオーナー制度という仕組みもつくっている。さらに、ここは有機農業でお茶をやっている農家の方もいる。この人もこだわりのお茶ということで広く都市に販売して生計を成り立たせている。また、農家の女性たちが、男性を経営に入れないで、ドレッシングなどの農産物加工工場をつくりあげている。農産物加工の製品の固定客を広げ、生産販売活動をはじめているのである。

このように、1つの郡を単位にして、その中心地である出水市にシフトしつつ地産地消という形で、郡という1つの領域の中で学校を通しながら地域づくりをしているのである。

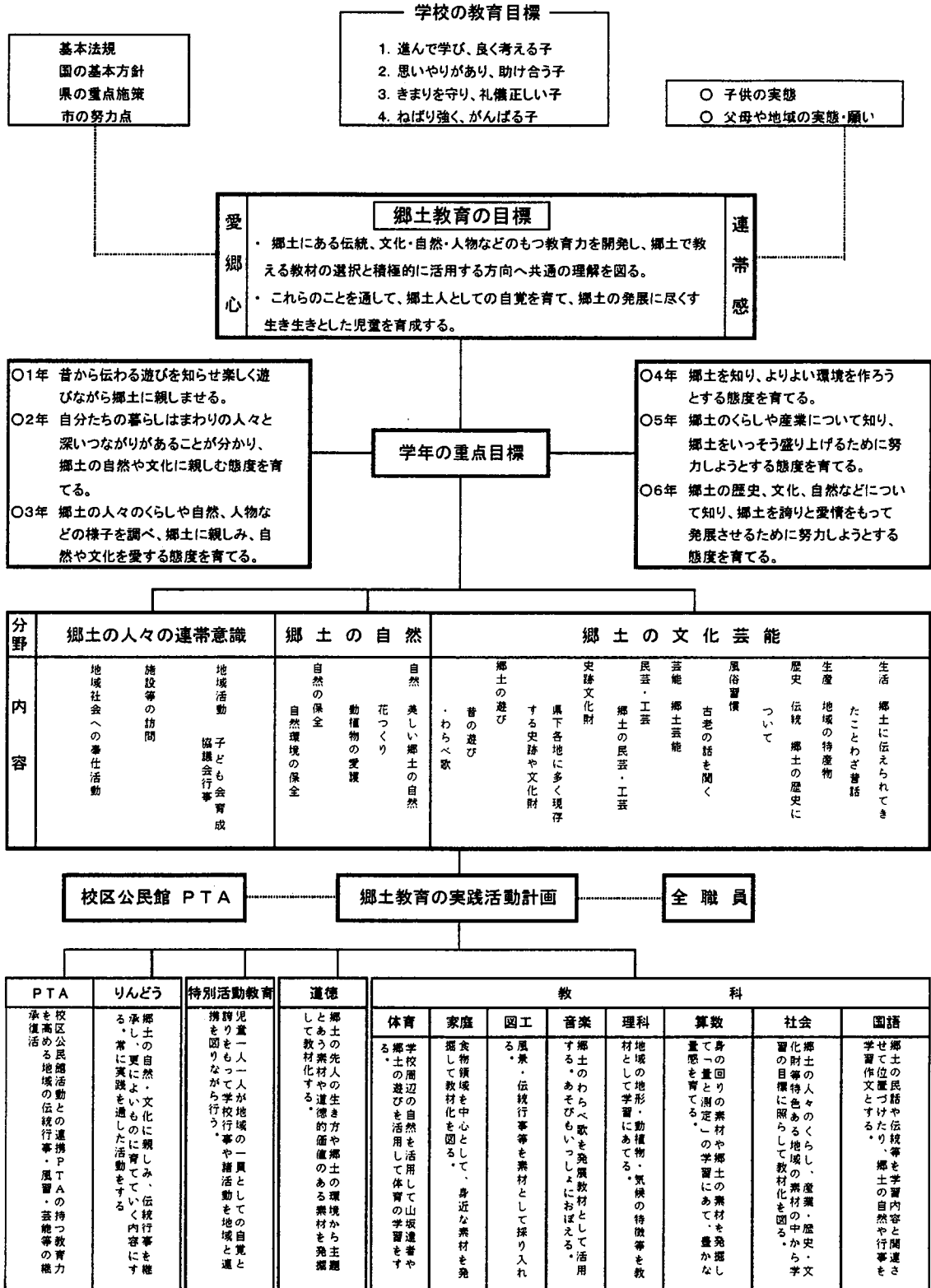
この学校の教育活動も、実は、地域の農業のことも、もちろん行っているわけであるが、交流活動に大変力を置いているのも1つの特徴である。資料2に小学校の郷土教育と交流教育活動ということで示した。ここでも外から人を受け入れる。それから土地が簡単に購入できるという条件があって、新しい動きがされている。

### 3 山村留学により農業・農村の教育的役割

2番目は、山村留学の事例である[神田(1995)]。南九州には塩児という慣行が昔からありまして、体が弱いか、我がままな子どもは、塩を売る商人を通しながら遠くの人にあずけるという習慣が伝統的にあった。そういう慣行があるせいもあり、山村留学ということは受け入れやすいというか、そういう社会的な慣行の基盤があった。鹿児島でも山村留学制度が各地域でさまざまに行われている。地方自治体の地方交付税などの予算絡みの山村留学の導入ではない。現在は子どもの数も非常に多くなって、都会から移住してくる人が増えてきて、新しい問題が生まれている。

この山村留学制度を導入していくうえで、霧島町という自治体は基本的にかかわっていない。どのようにして、予算はどこから捻出して、宣伝をやったり受け入れたりするのかわからない。山村留学の予算は、共有林野からの収入である。学校林野があるということで、1000万円近くの貯金の財産もある。そういう1つの経済基盤があって、地域として自主的に活動ができるということである。ここでは親子面接をきちっとして、いわゆる普通の子どもを受け入れているということが原則である。実は普通の子どもといっても非常に幅がある。里親が1日、2日子どもを見ながら、親も必ずそのときに来るけれども、そのとき子どもを見ながら普通の子どもだということで判断しているわけである。アトピーで悩んでいた子どもが治っていくとか、親から見るとさまざまな奇跡が起きている。子どものためだったら、ここに移転して生活しようと思う親がでてくるのである。最初は母親が移住して来る

資料2 郷土教育全体計画



わけけれども、次に父親が来るということである。実は霧島の永水は、近くに国分という都市があるから、そういう関係で仕事も見つけやすいせいもあって、移転してくる。中には、ここを気に入って農業をやって、有機農業で自活している人もいる。そんなことで、山村留学を通しながら、複式学級、学校統合という危機があったのだけれども、今は子どもが倍以上に増えて、非常に子どもが多くなって困っている。

#### 4 アイガモ農法・地域教材による総合学習

次に、3番目は、村づくりと校区公民館が連携しつつ、アイガモで総合学習をやっている、溝辺町竹子の事例である〔神田(2001)〕。ここは鹿児島大学も協力して網掛け川流域の生態系農学の研究ということで、大学挙げて取り組んでいるところである。

私どもの研究室では、学生の教育調査実習や教員養成のための米づくり実習を地域の人の援助と交流のもとに使わせてもらっている。お爺ちゃんやお婆ちゃん的生活史、青年団、PTA、地域組織について、調査しているが、先日も学生と一緒にそば刈りをしたが、学生も1日中、働いて疲れてグタツとして、翌日の授業も出ていかなかった学生も多かったようだけれども、そのように大学としても使わせてもらっているところである。教員養成のカリキュラムは全く自由な時間のないもので、地域にでかけていくことは、大変な面もある。他の授業担当者の教官の批判のなかで実践しているわけである。

竹子というのも、先ほどの霧島と同じように、ここは共有林野を持っている。地域の住民の人たちは共正会と言うのであるが、共正会を中心にして、学校教育と地域住民のかかわり合いというのが伝統的に強かった。教育委員会にお金がないときは、この共正会が木を切って講堂を建てたり、学校の施設をつくったりということをしてきたのである。学校の中にも共正会の事務所があり、公民館が学校の中にある仕組みになっていた。最近、共正会の集会所も大きくなり、学校の近くに公民館を建築している。

実は鹿児島県は、こういう小学校の校区公民館というのが各地にある。すべての市町村にあるわけではないけれども、共有林野を持っている地域が多いのである。学校林野をもっている学校も少なくない。伝統的にそういう地域とのかかわり合いが強いところは学校の中に公民館があったり、校区単位に公民館があったりする。つまり、校区公民館制度が充実しているという地域性がある。大都市である鹿児島市も農村の事例に学んで、現在はすべての小学校の敷地に校区公民館を建てている。校区公民館制度が充実しているという地域性がある。大都市である鹿児島市も農村の事例に学んで、現在はすべての小学校の敷地に校区公民館を建てている。

そういう点で、鹿児島の場合には、この校区公民館制度というのがほかの県に比べて大変強い力を持っている。溝辺町の竹子小学校も、地域の住民が積極的に学校教育の内容に参加していくというか、教育の専門性、自主性を言う教師たちにとっては干渉だと言われるぐらい、ここに来たらアイガモをしないと怒られるというぐらいに先生は地域に関心を持たされているが、農業の経験がない先生は非常に多いから、実際は総合的学習の時間は地域住民の人にやってもらうケースが多いように思われる。

## 5 地域の誇りの郷土教育と外にだしても帰ってくる教育

次に、沖永良部の和泊町についてつけ加えたい。ここも92年にむらづくり日本一になった地域である。96年に町として環境保全型推進農業の条例をつくったところである。実は和泊町というのは、花卉農家が多くて、高額の農業所得を上げる農家が大変多い地域で、いわゆるもうかる農業ということで盛んに宣伝されたところである。でも、もう一方で農薬に悩まされた島でもある。この農薬に悩まされた島の中で、和泊町はそれを何とかして克服したいということで、96年以降取り組み始めた地域であり、環境保全型農業推進条例をつくったところである。

具体的には、例えば、インドのユームというインドセンダンからとれたエキスを化学的農薬の代わりに利用したり、韓国の有機農業の工夫をしたりとか、さまざまなことをしている。まだ農薬をなくすことに完全に成功しているわけではないが、農薬の使用量を減らす取り組みをしているところである。

この地域で、最も農業所得の高いのが国頭集落ということで、沖永良部の空港のすぐ近くにある集落である。農業所得が高いということもあって、ここは全国一の子どもの出生率を誇っている。この国頭小学校は、100年前のガジュマルがあるというので、小学校の校庭にあるガジュマルが観光資源にもなっている地域である。ここでは伝統的に学校教育の中で、何を教えてきたのかということ、地域の生の姿というか、地域の人たちがどんな暮らしをしてきたのかということ、を地元としても熱心に教育をしてきたのである。

実は、この国頭というのは、和泊の中で、復帰当時は最も貧しかったところである。現在、学校教育として、ここは塩干しの母ということで母親の苦勞してきたことを伝承していくことをやっている。この母親達は、岩にたたきつける塩水を干して、塩を製造し、それを売りながら生計してきたということである。塩を炊く仕事というのは大変厳しい仕事であったわけである。それから国頭というのは、水がなかった地域で、水くみにも大変重労働を強いられてきた集落である。そのことを学校教育の中で率直に教えてきたというのが1つの伝統である。

そういう厳しい中で、この地域は所有観念というのが、本土に比べれば非常に低いという特徴を指摘できる。例えば、自分の庭の木が1本あっても、これは勝手に切れないわけである。木を1本切れば隣から文句が来る。自分の庭だから木を切ってもいいのではないかと思うのだけれども、そういう伝統的な地域の自然を保全していこうという風習があった地域で自分の庭の木を切るのにも近所に気を配るのである。

ソテツにしても非常に大事にしてきたのである。ソテツがあったことによって、よくソテツ地獄ということ、を奄美研究した人は言うけれども、この人は、そういうことは言わない。ソテツが我々の命を支えてくれたと言うのである。どんなときでもソテツがあるから我々は生きてこられたというソテツに対して感謝の気持ちを持っているのである。

つまり、ソテツというのは飢餓のときに救ってくれるということ。それから、ソテツというのは防風林にもなるし、ソテツの葉っぱは肥料にもなるということで、さまざまな効用をもたらしてきた。そういう地域の伝統的な誇りというのを、単に抽象的な誇りではな

くて、塩干しの母とか、ソテツの歴史だとか、みんなが協力してきたことを具体的に教材にして教えてきている。

学校の教師たちは、我々は子どもを地域に残すという教育を、今までしたことがないと言う。そんなことをしなくても、子ども達は必ず帰ってくると確信しているのである。また、友達も呼んでくれるのだということである。学校は、外に出そうという教育をしてきたということである。だから、外に出すためには学力を高めなければいけない。この学力も受験学力を高めなければいけないということで、一方で、非常に熱心に受験学力をしている地域である。だから、受験学力から言えば、若干過熱ぎみなところである。そのように外に出しながら豊かにしたいという地域である。

外に出るからこの島は過疎化していくかというのではなくて、必ず帰ってくるとのこと。昔から離島の場合は、黒潮文化の影響もあるのかもしれないけれども、海に出たら必ず帰ってくるといふことなのかもしれないけれども、自分達の島の文化、誇りをもっていれば、外に出ていった子どもは必ず帰ってくるといふことである。現に過疎化は進んでいない。

この4つの事例を比較しながら、都会の学校というのをみると、次章（玉井稿）も指摘するように、さまざまな矛盾を都会の学校は、抱えていると私は考える。だが、このような多くの矛盾をもっている学校ではあるけれども、学校を全面否定しないで、現実こういう僻地の中で一定の役割をしている学校をもっと積極的に評価しながら、農林行政と文部行政が結びつきながら、もっと積極的に学校を再生していく政策を打ち出す必要がある。

学校の再生には、農林行政からの役割も大きいのである。農林行政の協力によって、具体的に、農業・農村のもっている教育力の展望が持てるということである。学校の果たす役割というのは、やはり農村については大きいのだという主張が、本報告の狙いであったわけである。

### 【参考・引用文献】

- 神田嘉延(2002)「自治公民館による村づくりと小学校—鹿児島県出水市上場集落と上場小学校の事例—」(鹿児島大学教育学部『鹿児島大学教育学部教育実践研究センター紀要 第12巻』)所収, p.1~21。
- 神田嘉延(1995)「山村留学制度と子ども—鹿児島県霧島町永水小学校校区の事例を中心にして—」(鹿児島大学教育学部『鹿児島大学教育学部教育実践センター紀要 第5巻』)所収, p.1~17。
- 神田嘉延(2001)「村づくりと校区公民館—鹿児島県溝辺町竹子小学校校区の事例を中心にして—」(鹿児島大学教育学部『鹿児島大学教育学部教育実践センター紀要 第11巻』)所収, p.21~31。